

## マアジの生態と漁獲状況について

長崎県総合水産試験場  
 漁業資源部 海洋資源科

### はじめに

大衆魚としてなじみの深いマアジは、スズキ目アジ科に属しています。アジの仲間には、この他にマルアジ・ムロアジ・シマアジ等もありますが、量的にはマアジが最も多く漁獲されます。

マアジは、肉質が白身っぽくて、くせが無く、刺身・たたき・塩焼・から揚げ・干物など幅広い用途で利用されています。それではマアジの分布・生態、そして漁獲状況について、ご説明いたします。

### 分布・生態

マアジは、暖海から冷水までの広い水域の沿岸から沖合に生息する魚で、主な分布域は東シナ海から日本海西部です。マアジには分布生態の違いから区別される沖合回遊群のクロアジと瀬付き群のキアジがあります。また、クロアジには分布、回遊が異なる3つの群（九州北部群・東シナ海中部群・東シナ海南部群）が存在し、図1にはそれらの分布域を示しました。漁獲の主体は九州北部群と東シナ海中部群です。また、キアジは、漁獲量ではクロアジに比べ少ないものの、美味なため価格は高く、長崎県ではブランド名「ごんあじ」として、広く知られるようになりました。

このように広い海域に分布するマアジは、稚仔魚期には小型のプランクトンを主に食べますが、幼魚から成魚期にはオキアミ類などのプランクトンの他、小型の魚類や頭足類なども食べます。そして、満1歳で約17cm、2歳で約23cm、3歳で約27cm、4歳で約30cmに成長します。また、成長段階によって呼び名が変わり、一般に15cm以下はトウマゴ、15~20cmはゼンゴ、20~25cmは小アジ、25~30cmは中アジ、30cm以上は大ア

ジと呼ばれています。

マアジは一般に満3歳前後で成熟しますが、この成熟年齢は資源量の変動にともなって変化しており、資源が減少した昭和40年代前半には2歳魚の成熟率が高まるなど、産卵群の若齢化現象がみられました。

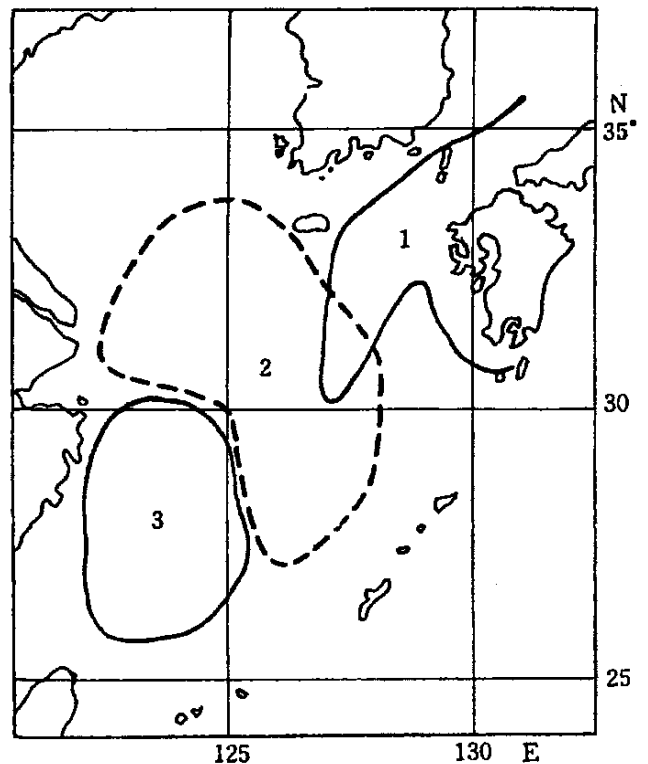


図1 九州北部および東シナ海のマアジの3群

- 1：九州北部群 2：東シナ海中部群  
 3：東シナ海南部群

(新版魚類学(下)より)

産卵盛期は、東シナ海中部群が2~3月、九州北部群が4~5月で、この時期の水温は16~17度です。産卵数は2~18万粒、卵の大きさは約1mmで、水温20度では40時間でふ化します。九州西沖から九州南西沖の海域で産まれた稚魚は対馬

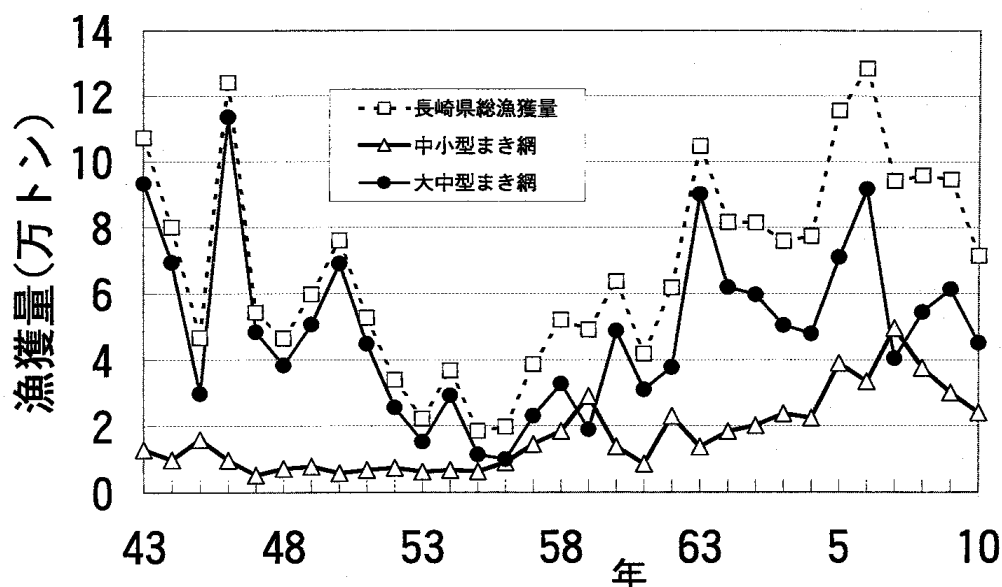


図2 長崎県におけるマアジ漁獲量の経年変化

暖流によって九州沿岸から日本海へと運ばれ、秋までその海域で過ごし、水温の降下とともに南下回遊します。その後は、春に北上、秋に南下という季節回遊を繰り返します。また、成長とともに、生息水深は深くなります。

### 漁獲量変動

図2には、昭和40年以降の長崎県におけるマアジ漁獲量の経年変化を示しました(農林水産統計年報)。マアジは、長崎県では、主に大中型まき網および中小型まき網で漁獲されます。総漁獲量は、昭和40年に21万トンを示した後、減少傾向を示し、昭和55年には1万8千トンまで低下しましたが、50年代後半から一転して増加傾向を示し、平成6年には12万8千トンまで増加しました。しかし、平成7年には10万トンを割り込み、以後は横這いで推移していました。しかし、

平成10年の漁獲量は前年を下回り、平成11年には10年を更に下回ったと考えられます。この主な原因としては、平成10年・11年と続けてその年生まれ群の加入量が少なかったことが考えられています。今後、マアジの資源動向には注意が必要です。

ところで、平成12年に各県が実施したモジャコ調査の際、マアジ稚魚の採捕が例年より多いことが報告されており、今年のマアジの発生量は例年より多いのではないかと、との感触を持っております。平成12年生まれ群が、順調に資源へ加入し、マアジ漁獲量の減少傾向に歯止めが掛かればと、期待しているところです。

(担当 水田浩二)